『ムスチスラフ福音書』における重出テクストについて-マタイ伝の場合-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1100

『ムスチスラフ福音書』における重出テクストについて

── マタイ伝の場合 ──

岩 井 憲 幸

はじめに

1117年以前に成立したと推定される[1]『ムスチスラフ福音書』(Мстиславово евангелие. 以下 Mst と略称) は，東スラブ語における文語の生成の歴史を研究する上で，1120年成立の『ユリエフ福音書』(Юрьевское евангелие. Jur と略称) とともに重要な文献とされている。我々は1092年『アルハンゲリスク福音書』(Архангельское евангелие. Arch と略称) さらに1096年『スヴャトスラフの文集』(Изборник Святослава 1096 года.) の言語を素材として，ルーシすなわち中世ロシアにおける文語の萌芽を探ってきたが[2]，今回は萌芽の最終期あるいは発達へむかう第二期を12世紀初めとみて，この時期の様相を探求せんとするものである。その素材として Mst の言語をとりあげたい。そして本稿では，その手はじめとして，重出テクストの問題を検討する (後述)。

1. Mst は次の刊本に依るものとする。
   Л. П. Жуковская и др., Апракос Мстислава великого, Изд-во 《Наука》, М., 1983.

本書はソ連科学アカデミー・ロシア語研究所により，国際スラヴィスト会議に向けて出版された同写本の翻刻テクストである。斯界の第一人者 Жуковская 女史らによるもので，Mst の全体のテクストは，今日この本によってしか見ることができない。本書は全528ページ，その主な内容は序論16ページ，本文259ページ，索引192ページ，重出テクスト対照表28ページである。

また本文中に16枚のモノクロームによる当該写本の参考写真が掲げられている。いずれにせよ研究用の出版物として供されている。

2. Mstはルーシにおける教会文献中の福音書において，完本あるいはほぼ完本として残る第三の書物である。すなわち1056-1057年『オストロミールの福音書』(Остромирово евангелие. Ostrと略称）と，第2のArchに続く。しかしながらこれら2書は，研究に際して翻刻本と写真複製本とが同時に利用できる状況にあるのに対し，Mstは上掲翻刻本のみであり，わずかに一部分を写真で窺うことができるに過ぎない。テクスト上の問題が生じた場合，依拠するものがない。我々は現在，Mst本文の順引き索引と逆引き索引とを作成するために本文をパソコンに打ち込み中であるが，テクストの問題が事実浮かびあがってきているのである。写真版の不在が研究に制限を加えかねない。しかしながら，OstrやArchよりも大きなテクストゆえに，言語の傾向性を読みとることは可能であろうと考えている。

3. 研究を開始するにあたり，Mstの文献学的事項を述べておかなければならない。しかしながら，上述の理由により目による確認はできないから，諸書により主要な記述を行なうにとどめたい。

『ムスチスラフ福音書』(Мстиславово евангелие）は，いわば通称であり，『ソ連邦スラブ・ロシア写本総合目録 —— 11～13世紀 ——』[3] では次のように収録される。

№51. ЕВАНГЕЛИЕ АПРАКОС ПОЛНЫЙ (《Мстиславово евангелие》).

これによって，Mstがテトラ（тетраевангелие）ではなくアプラコス（апракос）であり，しかもfull aprakos（полный апракос）であることがわかる[4]。なおOstrとArchはshort aprakos（краткий апракос）であり，Jurはテトラである。

Mstの通称は次のような写本の跋文（запись）から容易に理解できる。跋文の冒頭にこうある。(文字の制約上，大文字を用いて引用する。)

(212г-213а)[5] ГИ БЄ ОЦЬ НАШИХЪ. АВРААМОВЪ ИСАКОВЪ ИЊАКОВЛЂ. И СѢМЄNЄ ИХЪ ПРАВЬДЬNААГО. СЪПОДОБИВЪИ МА ГРѢШЬNААГО РАБА СВОЮГО АЛЄКСОУ NАПИСАТИ СИЮ ЄУАNГЄЛИЮ БЛГОВѢРЬNОУОУМОУ И ХРЬСТОЛЮБИВОѡМОУ. И БГМЬ ЧЬСТИМООМОУ КNАЗЮ ѲЄѡДОРОУ. А МИРЬСКЪІ

МЬСТИСЛАВОУ. ВЪNОУКОУ СОУЩЮ ВЬСЄВОЛОЖЮ А СNОУ ВОЛОДИМИРЮ. КNАЗЮ NОВЪГОРОДЬСКОУОМОУ. ИЖЄ СЪВЬРШИ СИЮ ЄУА(Г)Ю NА БЛ(С)ВNИЮ ПРѢСТѢИ ЧСТѢИ ВЛ(Д)ЧЦИ NАШЄИ БЦИ. ДАИ ЖЄ ЮМОУ ГЬ БЪ МЛ(О)СТЬ СВОЮ И NАСЛѢДИЮ Ц(С)РСТВА NБСЬNААГО. И ДЪЛГОЛѢ(Т)NО КNАЖЄNИЮ И СЪ ВСѢМИ СВОИМИ АМИNЬ：～(以下略。)[主なる神よ，我らの，アブラハムの，イサクの，ヤコブの，そして彼らの正しい種の，父よ。[汝は] 私を，[すなわち] 己れの罪深い僕であるアレクサを，正教に信仰厚き，キリストを愛する，神に尊ばれる侯テオドル，すなわちフセヴォロドの孫にしてノヴゴロドの侯ヴォロジミルの息子である俗名ムスチスラフのために，この福音書を書き上げることに値するものとして下された。ムスチスラフは，我らの聖母，いとも聖なる，この上なく清らかな神の御母の祝福のために，この福音書を完成させた。主なる神よ，彼に己れの憐みと，天の王国の遺産と，永きにわたる統治とを与えよ。そして [神である汝が] 己れのすべての人々と共に [おられるように]，アーメン。][6]

Mst は，洗礼名テオドル・俗名ムスチスラフがアレクサに注文して作らせた写本であった。このムスチスラフとはヴラジーミル・モノマフの子であり，後のキエフ大侯（1125 年以降）ムスチスラフ・ヴラジーミロヴィチ（1076–1132）を指す。copyist はアレクサの他に無名の者があったとされる。さらに成立年代については 1115 年とするもの，Жуковская のように 11c 末から 12c 初めの間と早めるもの等の説が存在するが，ここでは 1117 年以前と考える説に従う。

Mst の書誌は次の通りである。国立歴史博物館（ГИМ）所蔵。函架番号〈Син. 1203〉。大きさ 35.3×28.6 cm。全 213 葉。料紙はパーチメント。毎半葉左右 2 欄。文字はウスタフ体を使用。装釘や本文内の装飾については省略に従う。

4. テクストに関する我々の研究はこれからであるが，一瞥してわかる文字・音・文法事項について言及しておく。

1) 文字のうち юсы は，ѫ, ѭ, A が用いられるが，ѭ の使用は少数。音価は順に [u] [ju] [ja] である。すなわち文字 ОУ, Ю, Ꙗ と同価とみられる。すでにそれぞれの文字のヴァリアントとみなされていたと考

えられる。文字 ЪI は，Ы も存在しているようにみうけられるが，原本での確認を要する。

2) 軟音を示す《カギ》を有する字体，Д, Л, N が存在する。このうち Д の使用はごく少数である。例：(10в9-10) ИЖДЄNОУ.

3) スラヴ祖語での子音結合 *tj, *dj は，古代教会スラブ語（OCS）の対応形それぞれ št, žd で，東スラブ語（ES）のそれら č, ž での，両様の形が混在する。

4) 同様に，《子音間の流音＋イェル》の結合も，OCS 形・ES 形が混在するが，単語によってばらつきがあるようである。

5) 文法形態として，動詞 3 人称語尾は -ТЬ。OCS の -ТЪ に対立する。ただし CA が後続する再帰動詞ではしばしばイェルを落として -T のみで綴られる。CA との一続きの発音を反映したものか。

6) 男性名詞単数造格の語尾は -ЪMЬ。OCS の -ОMЬ に対立する。

7) 人称代名詞のうち，TЫ, СЄБЄ の単数造格において Arch では ТОБЄ, СОБЄ の形態の存在がみられたが，Mst では СОБЄ のみがごく少数存在するだけである。

8) 3 人称代名詞の複数対格は ꙗA，ただし N が前綴されると NA と綴られる。

9) 代名詞 КЪТО, ЧЬТО の綴りはイェルを脱落させた形 КТО, ЧТО が有勢である。

5. Mst の本文の一部を他の文献と並べて引用すれば，自ずとその性格の一端が知れるであろう。L 19.4 を『マリヤ写本』(Mar)，Ostr, Arch, Mst と平行して示す。又，参考のために 13 c ブルガリアのテトラ『バニシコ福音書』(Ban) を付す。

Mar (283)	И ПРѢДИ ТЄКЪ ВЪЗЛѢЗЄ
Ostr (113об)	И ПРѢДЬ ТЄКЪ ВЪЗЛѢЗЄ
Arch (68)	И ПРѢДИ ТЄКЪ ВЪЗЛѢЗЄ
Mst (107б)	И ПРИТЄКЪ ПРѢЖЄ ВЪЗЛѢЗЄ
Ban (135б)	ПРДѢ ТЄКЬ ВЬЗЛѢЗЄ

NA СVКОМОРИꙗ. ДА ВИДИТЪ I.
NA СУКОМОРИꙗ • ДА ВИДИТЬ ИІСА

NA ЮГОДИЧИNѿ ДА ВИДИТЬ ІС̄А •
NA ЮГОДИЧИNОУ ДА ВИДИТЬ І̄С̄А
NA ЮГОДИЧИNѿ. ДА ВИДИТЬ І̄С̄А.

ѢКО ТѿДѢ ХОТѢАШЄ МИNѿТИ.
ЮАКО ТѿДѢ ХОТѢАШЄ МИМОИТИ
ЮАКО ТОУДѢ ХОТѦАШЄ МИNОУТИ •
ЮАКО ТОУДОУ ХОТѦАШЄ МИМОИТИ.
ТѿДѢ БО ХОТѢШЄ МИNѿТИ.

Cf. *καὶ προδραμὼν εἰς τὸ ἔμπροσθεν ἀνέβη ἐπὶ συκομορέαν, ἵνα ἴδῃ αὐτόν, ὅτι ἐκείνης ἤμελλεν διέρχεσθαι.* [イエスを見るために，前の方に走って行って，いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからである。][7]

この文は以前にも《いちじく桑》という語彙を問題にした折に引用したが，この語のみならず，カノンである Mar に対して，副詞 ПРѢДИ，動詞 ВИДИТЬ ならびに ХОТѢАШЄ，ѿ の文字につき ТѿДѢ，МИNѿТИ を比較すれば，Ostr が Mar に近いながらもすでに一部東スラブ語化し，Arch と Mst はもはや東スラブ語化しておりかつ Ban に近いことが容易に感知できよう。問題は Arch と Mst において，どちらが東スラブ語化の度合いが強いかということである。この点については今後の我々の研究課題としたい。

6. 上で Mst は full aprakos に属することを述べた。ルーシにあっては aprakos は，full aprakos, short aprakos そして土曜・日曜および聖週のみのための aprakos（воскресное евангелие）の 3 種に類別されるという。このうち full aprakos はレントの週を除く毎日の聖務の章句を収録するが，聖書からの引用の選択に違いがあって，数種のヴァリアントを有するとされるのである。

full aprakos である Mst は，言語研究の側面からみれば，なによりも章句の豊富さ，さらに synaxarion と menologion での章句の重複（すなわち重出テクストの存在）が数においていっそう期待できるという利点を有する。この利点すなわち重出テクストを観察することから，なにか Mst の言語の特徴点を探ることはできないであろうか。

Mst の重出テクストに関しては，Жуковская の先行研究がある[8]。そこ

では主にカノン類との比較によって，full aprakos としての Mst の編纂のされ方につき吟味が加えられている。

7. 本稿では重出テクストにつき，特に語彙的側面をとりあげたい。Mst の重出テクストのうち，四福音書中マタイ伝（Mt）のみを試みに検討する。

Mst には，Mt の総 verse 1073 のうち，2 つ以上の重出テクストが存在する場合が 444 の verse でみられる。この 444 のうち 196 の verse ではテクストが同文であるとみなしうる。（以下，数は私に算えたもので多少の増減があるものと諒解されたい。）例えば Mt 5.1 は Mst において 2 箇所に次のように出現するが，綴りがロシア化[9]している点での差異はあるものの，同文とみなしうる。

Mt 5.1 (28a-б)　ОУЗЬРѢВЪ ЖЄ NАРОДЫ
〃　(188б)　ОУЗЬРѢВЪ ЖЄ NАРОДЫ

ВЪЗИДЄ NА ГОРѿ.　И ꙗКО СѢДЄ.
ВЪЗИДЄ NА ГОРОУ.　И ꙗКО СѢДЄ

ПРИСТОУПИША КЪ NЄМОУ ОУЧЄNИЦИ ЄГО.
ПРИСТОУПИША К　NЄМОУ ОУЧЄNИЦИ ЄГО.

この文は，カノンのうちのテトラの『ゾグラフォス写本』（Zog）とも，アプラコスの『アッセマーニ写本』（Ass）とも同文である。

Zog (4v) ОУЗЬРѢВЪ ЖЄ NАРОДЫ ВЬЗИДЄ NА ГОРѿ・І ѢКО СѢДЄ ПРИСТѾПИША КЪ N̑ЄМОУ ОУЧЄNИЦИ ЄГО・[Cf. *Ἰδὼν δὲ τοὺς ὄχλους ἀνέβη εἰς τὸ ὄρος・καὶ καθίσαντος αὐτοῦ προσῆλθαν αὐτῷ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ*・[イエスはこの群集を見て，山に登り，座につかれると，弟子たちがみもとに近寄ってきた。]]；Ass (113c) И ОУЗЬРѢВЪ ЖЄ NАРОДЪИ・ВЪЗИДЄ NА ГОРѿ・И ѢКО СѢДЄ ・ПРІСТѾПІША КЬ NЄМОУ ОУЧЄNИЦИ ЄГО・

カノンでアプラコスの『サバの本』（Sav）はブルガリアでの制作だが，やはり同文である。

Sav (124об.) ОУЗЬРѢВЪ ЖЄ NАРОДЪ И ВЬЗИДЄ NА ГОРѿ. И ꙗКО СѢДЄ. ПРИСТѾПИША КЪ NЄМꙋ ОУЧЄNИЦИ ЄГО.

さらにロシアの Ostr には 1 語の付加があるが，他は同文とみてよい。又，

残念ながら Arch にはこの文は存在しない。

Ostr (211об.) ОУЗЬРѢВЪ ЖЄ NАРОДЪ МЪNОГЪ • ВЪЗИДЄ NА ГОРѢ И ЮКО СѢДЄ • ПРИСТѢПИША КЪ NЮЄМОУ • ОУЧЄNИЦИ ЮЄГО •

以上から Mst の Mt 5.1 は，古くからの伝統的なテクストを伝承しているとみることができる。いわば中世ロシアの地にあって容易に理解しえた安定した verse であったと考えることができようか。ロシアにあって，Ostr で付加がみられる点はやや注意を要するが，Arch で欠文ゆえこれ以上のことは言いえない。

7. 残りの重出テクスト 248 では，

1) Mst の重出テクスト間では一致しながらも，他本とは異なる場合

2) Mst の重出テクスト間で不一致の場合

とがみられる。

1)の例は次の通りであるが，ここでは《СЪБОРИЩЄ》に注目すると，Mst はこの語を用いて一致するが，カノンでは《СЪNЬМИЩЄ》を用いて異なる。(以下下線は筆者による。以下同じ。)

Mt 4.23 (Mst 28a) И ПРОХОЖААШЄ ІСЪ

〃 (〃 32a) И ПРОХОЖААШЄ

ВСЮ ГАЛИЛѢЮ. ОУЧА NА <u>СЪБОРИЩИХЪ</u>.

ВСЮ ГАЛИЛѢЮ ИІСЪ. ОУЧА NА <u>СЪБОРИЩИХЪ</u>

И ПРОПОВѢДАЮ ЄУАNГЄЛИЮ ЦРСТВА.

ИХЪ. ПРОПОВѢДАЮ ЄУАNГЄЛИЮ Ц(С)РЬСТВА.

ИЦѢЛАЮ ВЬСЬ NЄДѢГЪ И ВСЮ ЮЗЮ ВЪ ЛЮДЬХЪ.

ИЦѢЛАЮ ВЬСЬ NЄДОУГЪ. И ВЬСЮ ЮЗЮ ВЪ ЛЮДЬХЪ : ~

Cf. Zog(4) І ПРОХОЖДААШЄ ВСѢ ГАЛИЛЄѢ ИС • ОУЧА NА <u>СЪNЪМИШТИХЪ</u> ІХЪ • І ПРОПОВѢДАЮ ЄВАѢЛИЄ ЦРСТВИѢ • І ЦѢЛА ВЬСѢКЪ NЄДѢГЪ • І ВСѢКѢ ЮЗѢ ВЪ ЛЮДЄХЪ • [*Καὶ περιῆγεν ἐν ὅλῃ τῇ Γαλιλαίᾳ, διδάσκων ἐν ταῖς συναγωγαῖς ἀυτῶν καὶ κηρύσσων τὸ εὐαγγέλιον τῆς βασιλείας καὶ θεραπεύων πᾶσαν νόσον καὶ πᾶσαν μα-*

λακίαν ἐν τῷ λαῷ. [イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて，諸会堂で教え，御国の福音を宣べ伝え，民の中のあらゆる病気，あらゆるわずらいをおいやしになった。]] ; Ass (35c) И ПРОХОЖДААШЄ ВЪСѢ ГАЛІЛЄѢ ИСЪ • ОУЧА NA СЬNЪМИШИИХ • И ПРОПОВѢДАЊА ЄВѢЛИЄ ЦРСТВИЮ • И ИЦѢЛѢЊА ВЪСѢКЪ NЄДѢГЬ • И ВСѢКѢ ЊАSѢ ВЪ ЛЮДЄХЪ·∴···— ; Sav (32) И ПРОХОЖДАШЄ ВСѢ ГАЛИЛЄѢ. ІС ОУЧА NA СЪNЬМИЩИХЪ. И ПРОПОВѢДАА ЄВАЛИЄ ЦРСТВИЊА ИЦѢЛѢА ВСАКЪ NЄДѢГЪ. И ВСАКѢ АЗѢ ВЬ ЛЮДЄХЪ : ∽

だが，一方ロシアの Ostr は Mst と同じく《СЪБОРИЩЄ》を，Arch はカノンと同じく《СЪNЬМИЩЄ》を用いている。（この選択の違いについては後述する。）

Ostr (60об.) И ПРОХОЖДААШЄ ВЪСѢ ГАЛИЛЄѢ ИІСЪ • ОУЧА NA СЪБОРИЩИХЪ ИХЪ И ПРОПОВѢДАЊА ЄУАNЬГЄЛИЄ ЦРСТВИЊА • И ИСЦѢЛЊАЊА ВЬСАКЪ NЄДѢГЪ И ВЬСАКѢ ЊАЗѢ ВЪ ЛЮДЬХЪ·∴··— ; Arch (27) И ПРОХОЖДААШЄ ВЬСУ ГАЛИЛѢЮ ІСЪ • ОУЧА NA СЪNЬМИЩИХЪ ИХЪ. И ПРОПОВѢДАЊА ЄВАNГЛИЄ•ЦРТВИЊА•ИЦѢЛАЊА ВЬСАКЪ NЄДОУГЪ. И ВЬСАКОУ ЊАЗЮ ВЪ ЛЮДЬХЪ·∴·

2)の例は次の通りである。ここでは《ПОNОСИТИ》という動詞に注目する。Mst の重出テクストの一方では一致するが，他方では一致せず，別語を用いている。

Mt 5.11 (Mst 28б) БЛЖNИ ЄСТЄ ЄГДА
〃 (〃 188в) БЛЖNИ ЄСТЄ ЄГДА

ОУКОРАТЬ ВЫ И ИЖДЄNОУТЬ ВЫ
ПОNОСАТЬ ВАМЪ И ИЖДЄNѹТЬ ВЫ.

И РЄКѢТЬ ВЬСЬ ЗЪЛЪИ ГЛЪ NA ВЪ
И РЄКОУТЬ ВСАКЪ ЗЪЛЪ ГЛЪ NA ВЪ

ЛЪЖЮЩЄ МЄNЄ РАДИ.
ЛЪЖЮЩЄ МЄNЄ РАДИ.

この場合，カノンでは次のように《ПОNОСИТИ》の語を用いているのである。

Zog (5) БЛАЖЄNИ ЄСТЄ ЄГДА ПОNОСАТЪ ВАМЪ • І ИЖДЄNѿТЪ ВЫ•І РЄКѿТЪ • ВЬСѢКЪ ЗЪЛЪ ГЛЪ NА ВЫ • ЛЪЖѿШТЄ МЄNЄ РАДИ : [*μακάριοί ἐστε ὅταν ὀνειδίσωσιν ὑμᾶς καὶ διώξωσιν καὶ εἴπωσιν πᾶν πονηρὸν καθ' ὑμῶν ψευδόμενοι ἕνεκεν ἐμοῦ.* [わたしのために人々があなたがたをののしり，もし迫害し，あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には，あなたがたは，さいわいである。]] ; Ass (113d) БЛАЖЄNІ ЄСТЄ ЄГДА ПОNОСАТЪ ВАМЪ • [···] ИЖДЄNѿТЪ ВЫ • И РЄКѿТЪ ВЪСЬ ЗЬЛЬ ГЛЪ NА ВЫ ЛЪЖАШТЄ МЄNЄ РАДІ •

ロシアの Ostr もカノンに一致する。Arch は残念ながら欠文である。

Ostr (212об.) БЛАЖЄNИ ЮСТЄ • ЮГДА ПОNОСАТЬ ВАМЪ • И ИЖДЄNѿТЬ • И РЄКѿТЬ • ВЬСАКЪ ЗЪЛЪ ГЛЪ NА ВЫ • ЛЪЖѿЩЄ МЄNЄ РАДИ

実の処，上例では動詞の《ПОNОСИТИ》と《ОУКОРИТИ》はシノニムである。Mt 5.11 での両語の交替例はみられないものの，《ОУКОРИТИ》もカノンにおいて使用が認められる語であり，Mt 5.11 で容易に言い換えることができたと考えることができる。このことは 1)の例でも言えることである。

Mst における重出テクストをテクスト内の対比によって検討する時，同一 verse の中にさまざまな変更が重層的に加えられた結果がこれであると，容易に想像することができる。例えば，Mt 13.47 は次のように 2 箇所でやや異なって出現する。

Mt 13.47 (40в) ПАКЪІ ПОДОБЬNО ЮСТЬ
〃 (170г) ПАКЪІ ПОДОБЬNО ЮСТЬ

ЦѢСАРЬСТВО NБСЬNОЮ. МРѢЖИ
Ц(С)РСТВО NБСЬNОЮ NЄВОДОУ

ВЪВЬРЖЄNѢ ВЪ МОРЄ И ѡТЪ ВСАКОГО
ВЪВЬРЖЄNОУ ВЪ МОРЄ. И ОТЪ ВСЄГО

ПЛЄМЄNЄ СЪБЬРАВЪШИ.
РОДА СЪБЬРАВЪШѹ

ここで問題にしたいのは《ЦѢСАРЬСТВО》《NБСЬNОЮ》《МРѢЖИ/NЄВОДОУ》《ВСАКОГО/ВСЄГО》《ПЛЄМЄNЄ/РОДА》の語である。カノンには次のように出現する。

Zog (33) ПАКЪ ПОДОБЬNО ЄСТЬ ЦРСТВИЄ БЖИЄ NЄВОДОУ ВЪВРЪЖЄNОУ ВЪ МОРЄ • І ОТЪ ВСѢКОГО РОДА СЪБЪРАВЪШЮ • [*Πάλιν ὁμοία ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν σαγήνῃ βληθείσῃ εἰς τὴν θάλασσαν καὶ ἐκ παντὸς γένους συναγαγούσῃ* • [また天国は，海におろして，あらゆる種類の魚を囲みいれる網のようなものである。]]；Ass (122a) И ПАКЪИ • ПОДОБЬNО ЄСТЬ ЦРСТВО NБСNОЄ • NЄВОДОУ ВЪВРЪЖЄNОУ ВЪ МОРЄ•И Ѻ ВЪСЄГО РОДА СЪБЬРАВЪШОУ•；Sav (132) ПАКЪ. ПОДОБЬNО ЄСТЬ ЦРЬСТВО NБСКОЄ. NЄВОДОУ ВЪВРЬЖЄNОУ ВЪ МОРЄ. ОТЪ ВСАКОГО РОДА СЪБЪРАВЪШЮ

ロシアの Ostr, Arch は次のようである。

Ostr (227) ПАКЪ ПОДОБЬNО ЮСТЬ ЦРСТВИЮ NБСЬNОЮ • NЄВОДОУ ВЪВЬРЖЄNОУ ВЪ МОРЄ • И ОТЪ ВЬСЬАКОГО РОДА СЪБЬРАВЪШОУ；Arch (133) ПАКЪ ПОДОБЬNО ЮСТЬ ЦРСТВО NБСNОЮ NЄВОДОУ ВЪВЬРЖЄNОУ ВЪ МОРЄ • И ѿ ВСАКОГО РОДА СЪБЬРАВЪШЮ •

つまりは，上記の語《ЦѢСАРЬСТВО》《NБСЬNОЮ》《МРѢЖИ/NЄВОДОУ》《ВСАКОГО/ВСЄГО》《ПЛЄМЄNЄ/РОДА》に着目しながら Mst の Mt 13.47 の重出テクストを見れば，170г に出現するテクストは主にカノンに依拠するごとくである。（ちなみに Ostr, Arch もこれと同じとみてよい。）《ЦѢСАРЬСТВО》と《ЦРСТВИЄ》，《NБСЬNОЮ》と《БЖИЄ》の違いは，アプラコスとテトラの違いと言えそうである。ただし《ВСЄГО》については，Zog, Sav が《ВСАКОГО/ВСАКОГО》，Ass《ВЪСЄГО》とわかれてしまうが，Mst では何らかの選択が働いたか。これに反し，140в のテクストは，《ЦѢСАРЬСТВО》《NБСЬNОЮ》では同じだが，カノンの《NЄВОДОУ》に対し《МРѢЖИ》を，同じく《РОДА》に対し《ПЛЄМЄNЄ》と変更を加え，《ВСАКОГО》を選択している。140в のテクストは 170г のそれに比して，新しい改変がおびただしい。また《ВСАКОГО/ВСЄГО》の語は両テクストで選択が存在するといえる。つまり，両テクストは程度の差こそあれ，重層的に変更が加えられた結果のものであろうと考える。

翻ってみれば，上掲 1) 2) の例も，大局的にはカノン内のシノニム（特にダブレット）の利用による言い換えが主であるといえる。（さらに言えば，時制の変更や句による言い換え等，語彙論的のみならず，形態やシンタクス上の変更の事実もあまた存在する。）しかし，この言い換えは誰によって，どのような根拠で，さらに何の目的でなされたのであろうか。

8. 上述の問いには容易に答えられるものではない。しかしながら，次例のように『スプラシル写本』(Supr) に特有の語彙が言い換えに用いられているという事実は，一つの解答を示唆するのではなかろうか。

第 1 の例では Supr で用いられている語《КОТЪГА》を《РИЗА》のかわりに用いている。

① Mt 23.5 (Mst 61a) ВСА ЖЄ ДѢЛА СВОЮ ТВОРАТЬ ДА ВИДИМИ БОУДОУТЬ ЧЛ(О)ВКЪІ. РАШИРАЮТЬ ЖЄ ХРАNИЛИЩА СВОЮ И ВЄЛИЧАЮТ СА ПОДОЛЪКЪІ КОТЪІГЪ СВОИХЪ.

Mst での重出テクストは次のように《РИЗА》を用いており，他のカノンも同様である。（Zog は欠文ゆえ Mar で代用する。）

Mst (134б) ВЬСА ЖЄ ДѢЛА СВОЮ ТВОРАТЬ ДА ВИДЇМИ БОУДОУТЬ ЧЛ(О)ВКЪІ. РАШЇРАЮТЬ ЖЄ ХРАNИЛИЩА СВОЮ И ВЄЛИЧАЮТЬ СА ПОДОЛЪКЪІ <u>РИЗЪ</u> СВОИХЪ. ; Cf. Mar (82) ВЬСѢ ЖЄ ДѢЛА СВОѢ ТВОРАТЪ ДА ВИДИМИ БѿДѿТЪ ЧЛВКЪІ. РАШИРѢѾТЪ ЖЄ ХРАNИЛИШТА СВОѢ. І ВЄЛИЧАѾТЪ ПОДЪМЄТЪІ. ВЬСКРИЛИѢ РИЗЪ СВОИХЪ. [*πάντα δὲ τὰ ἔργα αὐτῶν ποιοῦσιν πρὸς τὸ θεαθῆναι τοῖς ἀνθρώποις•πλατύνουσιν γὰρ τὰ φυλακτήρια αὐτῶν καὶ μεγαλύνουσιν τὰ κράσπεδα*, [そのすることは，すべての人に見せるためである。すなわち，彼らは経札を幅広くつくり，その衣のふさを大きくし，]]

ここでは今《КОТЪГА：РИЗА》のみを問題としたが，事情はやや複雑である。ギリシア語本文の《*κράσπεδον*》はここではユダヤ人が上着の裾につけた《房》を言う。よって，この《*τα κράσπεδα*》を Mar は《ПОДЪМЄТЪІ. ВЬСКРИЛИѢ РИЗЪ СВОИХЪ. [己れの着物の裾の<u>裾</u>を]》のごとく，シノニムの《ПОДЪМЄТЪ》と《ВЪСКРИЛИЮ》とを重ねて用いることによって，特別の意味をもたせようとしている。しかも《*κράσπεδον*》はふつう《へり・ふち》さらに《着物の裾》も言うから，混乱を生じることにつなが

る。Ostr はこの部分を《ПОДЪМЄТЫ РИЗЪ СВОИХЪ》(80) と省略してしまっている。すなわち《己れの着物の裾を》の意である。Mst の場合，この訳を踏襲し，さらに《ПОДЪМЄТЫ》を，ES の《ПОДОЛЪКЪ》にまで変更しているのである。(またさらに動詞の変更もある。) このように見てくる時，《上着》《裾》の語まで含めて問題にしなければならないが，Mar と同文なのは Ass (47b) であり，さらに Arch (43v) である。(引用は割愛する。) これらではすべて《РИЗА》《ПОДЪМЄТЪ》《ВЪСКРИЛИЄ》の語を用いる。Ostrは《РИЗА》《ПОДЪМЄТЪ》の語を用いる。よって Mst の《КОТЫГА》《ПОДОЛЪКЪ》の使用は特異である。(Zog, Sav は欠文。)

第 2 の例では Supr での用語《ЮАРЬМЪ》を《ИГО》に対して用いる場合である。

② Mt 11.29–30 (Mst 35г) ВЪЗЬМѢТЄ ЮАРЬМЪ МОИ NA СА. И NAОУЧИТЄ СА ОТЪ МЄNЄ ЮАКО КРОТЪКЪ ЮСМЬ И СЪМѢРЄNЪ СРДЦЬМЬ. И ОБРАЩЄТЄ ПОКОИ ДШАМЪ ВАШИМЪ. ЮАРЬМЪ БО МОИ БЛАГЪ. И БРѢМА МОЮ ЛЬГЪКО ЮСТЬ : ～

Mst の重出テクストは次のように《ИГО》を用いる。他本も比較せよ。

Mst (188г) ВЪЗЬМѢТЄ ИГО МОЮ NA СА И NAОУЧИТЄ СА ОТЪ МЄNЄ ЮАКО КРОТЪКЪ ЮСМЬ И СЪМѢРЄNЪ СРДЦЬМЬ. И ОБРАЩЄТЄ ПОКОИ ДШАМЪ ВАШИМЪ. ИГО БО МОЮ БЛГО. И БРЄМА МОЮ ЛЬГЪКО ЮСТЬ : ～ ; Cf. Zog (25) ВЬЗЬМѢТЄ ІГО МОЄ NA СЄБѢ • І NAОУЧИТЄ СА ОТЪ МЄNЄ • ЬКО КРОТЪКЪ ЄСМЬ • І СЪМѢРЄNЪ СРЪД'ЦЄМЬ • І ОБРАШТЄТЄ ПОКОИ • ДШАМЪ ВАШИМЪ • ІГО МОЄ БЛАГО • І БРѢМА МОЄ ЛЬГЪКО ЄСТЬ • [*ἄρατε τὸν ζυγόν μου ἐφ' ὑμᾶς καὶ μάθετε ἀπ' ἐμου, ὅτι πραύς εἰμι καὶ ταπεινὸς τῇ καρδίᾳ, καὶ εὑρήσετε ἀνάπαυσιν ταῖς ψυχαῖς ὑμῶν • ὁ γὰρ ζυγός μου χρηστὸς καὶ τὸ φορτίον μου ἐλαφρόν ἐστιν.* [わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである」。]]

Mar (36), Ass (128b), Sav (135), Ostr (244), Arch (139v) すべて《ИГО》の語を用いる。(引用は割愛する。)

以上の 2 例が Supr で用いられている語によって言い換えられている例である。いうまでもなく，Supr は 11 世紀ブルガリアの写本である。Mst の

言い換えは，キュリロス・メトディオス期以来の伝統的な語彙が新しいシュメオン帝期のブルガリア語によってなされている可能性がある，と言えるであろう。

次の2つの前置詞の例も，上例に準じるものではなかろうか。すなわち《РАДИ》に対する《ДѢЛЮ》，《ВЪ》に対する《ОУ》である。

③ Mt 13.52 (Mst 40г) ІС҃Ъ ЖЄ РЄЧЄ ИМЪ. ТОГО ДѢЛГА ВЬСЬ КНИЖЬНИКЪ NАОУЧЬ СА. Ц(С)РСТВИЮ НБ҃СЬNОУОУМОУ ПОДОБЬNЪ ЮСТЬ ЧЛ(О)ВКОУ ДОМОВИТѢ ИЖЄ ИЗNОСИТЬ ОТЪ СЪКРОВИЩА СВОЮГО. NОВАЮ И ВЄТЪХАЮ. ; (Mst 171a) ІС҃Ъ ЖЄ РЄЧЄ ИМЪ. СЄГО РАДИ ВЬСАКЪ КНИЖЬНИКЪ NАОУЧЬ СА Ц(С)РСТВИЮ НБ҃СЬNОУОУМѹ. ПОДОБЬNЪ ЮСТЬ ЧЛ(О)ВКОУ ДОМОВИТОУ ИЖЄ ИЗNОСИТЬ ОТЪ СЪКРОВИЩА СВОЮГО NОВАЮ И ВЄТЪХАЮ.; Cf. Zog (33) ИС҃ ЖЄ РЄЧЄ ІМЪ•СЄГО РАДИ ВЬСѢКЪ КЪNИЖЬNИКЪ•NАОУЧЬ СА ЦРС҃ТВИЮ NЄБ҃СКОУМОУ • ПОДОБЬNЪ ЄСТЪ ЧК҃ОУ ДОМОВИТОУ • ІЖЄ ІЗNОСИТЬ ОТЪ СЪКРОВИШТА СВОЄГО NОВАѢ І ВЄТЪХАѢ • [*ὁ δὲ εἶπεν αὐτοῖς • διὰ τοῦτο πᾶς γραμματεὺς μαθητευθεὶς τῇ βασιλείᾳ τῶν οὐρανῶν ὅμοιός ἐστιν ἀνθρώπῳ οἰκοδεσπότῃ, ὅστις ἐκβάλλει ἐκ τοῦ θησαυροῦ αὐτοῦ καινὰ καὶ παλαιά.* [そこで，イエスは彼らに言われた，「それだから，天国のことを学んだ学者は，新しいものと古いものとを，その倉から取り出す一家の主人のようなものである」。]]

Mar (47), Ass (122a), Sav (132), Ostr (227об.), Arch (133) すべて《СЄГО РАДИ》を用いている。ここに Sav が含まれるが，《ДЮЛЮ》は Sav, Supr 等に特有の語である。『スヴァトスラフの文集』1073年にも多用される。

④ Mt 13.56 (Mst 182в) И СЄСТРЫ ЮГО NЄ ВСѢ ЛИ ОУ NАСЪ СОУТЬ. ОТЪКОУДѢ ОУБО СЄМѹ ВСА СИ СОУТЬ ; (Mst 41в) И СЄСТРЫ ЮГО. NЄ ВЬСА ЛИ ВЪ NАСЪ СОУТЬ. ОТЪКѢДѢ ОУБО СЄМОУ ВСА СИ СѢТЬ. ; Cf. Zog (34) І СЄСТРЫ ЄГО • NЄ ВЬСИ ЛИ ВЪ NАСЪ СѢТЪ • ОТЪ КѢДОУ ОУБО СЄМОУ ВСѢ СИ СѢТЪ • [*καὶ αἱ ἀδελφαὶ αὐτοῦ οὐχὶ πᾶσαι πρὸς ἡμᾶς εἰσιν ; πόθεν οὖν τούτῳ ταῦτα πάντα* ; [またその姉妹たちもみな，わたしたちと一緒にいるではないか。こんな数々のことを，いったいどこで習ってきたのか」。]]

Mar (48) も《ВЪ NАСЪ》と Zog に同じだが，Ass, Sav, Ostr, Arch ではす

べて欠文である。問題はギリシア語前置詞《πρός》の訳語ということになるが，《πρός》は対格を伴うが《～の側に・近くに・と共に》と，運動は imply されない意味である。Zog, Mar の訳は《NACЪ》を対格ととれば，いわばギリシア語の直訳とも解しうるし，一方では《NACЪ》を所格ととれば，意訳したとも解することができる。これに対し，Mst の《OУ NACЪ》の場合，単純に《NACЪ》を生格ともとりうるであろう。しかしながら，《OУ》は対格も所格もとりうる前置詞であり[10]，この点からすれば Zog, Mar の《BЪ NACЪ》の単なる言い換えにすぎない。そうであれば，方言的言い換えであり，ここにも Supr などでの用法の反映が存在するのではなかろうか。

以上 Mst の重出テクストの言い換えの一部は，キュリロス・メトディオス期以来の伝統的語彙を 11 世紀シュメオン帝期のいわば新しいかつ地方的語彙を用いて，その点では新しい伝統に即した言い換えであった可能性がある。それは当時の東スラブ人にとってより理解しやすい語への改修であり，Mst の編纂者による意識的書き換えであった可能性があると考えられる。むろん Mst 編纂時の一時的事例ではなく，シュメオン帝ブルガリアにおいてなされた釈義の体系を学習し，これに従うという新しい伝統下にあった作業ではなかったであろうか。

9. さらに歩を進めて，言い換えを東スラブに独自のものとして行なった例が存在する。すなわち《AMИNЬ/AMИNЪ》を《ПРАВО》で言い換えるものである。Mt 18.18 の重出テクストに次のようにある。(Cf. 以下該所は Zog[b] ゆえ Mar をかわって引用する。)

Mt 18.18 (Mst 27б) АМИNЪ ГЛ҃Ю ВАМЪ. ЄЛИКО АЩЄ СЪВАЖЄТЄ NA ЗЄМЛИ БОУДЄТЬ СЪВАЗАNO NA N҃БСИ. И ЄЛИКО АЩЄ РАЗДРѢШИТЄ NA ЗЄМЛИ. БС҃ДЄТЬ РАЗДРѢШЄNO NA N҃БСИ. ;
(Mst 46б) …ПРАВО Г҃ЛЮ ВАМЪ. ЄЛИКО АЩЄ СЪВАЖЄТЄ NA ЗЄМЛИ БОУДЄТЬ СЪВАЗАNЪ NA N҃БСѢХЪ. И ЄЛИКО АЩЄ РАЗДРѢШИТЄ NA ЗЄМЛИ БОУДЄТЬ РАЗДРѢШЄNO NA N҃БСѢХЪ. ;
Cf. Mar (63) АМИNЬ Г҃ЛЮ ВАМЪ. ЄЛИКО АЩЄ СЪВАЖЄТЄ NA ЗЄМИ. БС҃ДЄТЪ СЪВАЗАNO NA NЄБЄСЄХЪ. І ЄЛИКО АШТЄ РАЗДРѢШИШИ NA ЗЄМИ. БС҃ДЄТЪ РАЗДРѢШЄNO NA N҃БСХЪ.
[*Ἀμὴν λέγω ὑμῖν, ὅσα ἐὰν δήσητε ἐπὶ τῆς γῆς ἔσται δεδεμένα ἐν οὐρανῷ,*

καὶ ὅσα ἐὰν λύσητε ἐπὶ τῆς γῆς ἔσται λελυμένα ἐν οὐρανῷ. [よく言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは，天でも皆つながれ，あなたがたが地上で解くことは，天でもみな解かれるであろう。]]

OCS の文献中，《ПРАВО》が《*ἀμήν*》の義で用いられるのは，SJS に依れば，《Homiliae s. Gregorii Magni》であるという。この文献はボヘミア起源の 13 世紀ロシアのものである。《ボヘミア起源》という点に用語法上の系譜に関してやや躊躇をおぼえるが，しかしながら，上記引用のごとくに 12 世紀前期のルーシの Mst に明瞭な用例が先んじて存在していることもまた事実である。OCS の《АМИNЬ/АМИNЪ》を《ПРАВО》とルーシにおいて言い換えたごく初期のケースとみておきたい。Срезневский の辞典や現在刊行中の『11～17 世紀ロシア語辞典』(11) も Mst を初出文献として掲げているのである。

なおこの《ПРАВО》の用例は，Mt 16.28；Mt 18.18；Mt 18.19；Mt 21.21；Mt 21.31；Mt 23.36；Mt 24.2；Mt 24.27；Mt 25.40 にも出現する。おのおのの引用は割愛するが，当該の語につき，上記引用の分も含めて他本との対照表を提示しておく。○は《ПРАВО》，△は《АМИNЬ/АМИNЪ》を示し，×は欠文であることを示す。

verse	Mst 重出テクスト	Zog	Mar	Ass	Sav	Ostr	Arch	Ban
Mt 16.28	44в ○ 174г ○	×*	△	×	×	×	×	△
Mt 18.18	27б △ 46б ○	×*	△	△	△	△	△	△
Mt 18.19	27б △ 46б ○	×*	△	△	△	△	△	△
Mt 21.21	49a ○ 131a △	×*	△	×	×	×	×	△
Mt 21.31	49в ○ 131б △ 184a ○	×*	△	×	×	×	×	△
Mt 23.36	52a ○ 135в △ 165г ○	×*	△	△	×	△	△	△

verse	Mst 重出テクスト	Zog	Mar	Ass	Sav	Ostr	Arch	Ban
Mt 24.2	63г ○ 135г △	×*	△	△	×	△	△	△
Mt 24.47	53б ○ 136б △ 170в ○	△	△	△	△	△	△	△
Mt 25.40	117в ○ 137г △	△	△	△	△	△	△	△

* Zog^{b} 部分ゆえ×とする。

この表から《ПРАВО》の言い換えが，Mst に特異であることは，ただちに諒解できるであろう。

おわりに

Mst が full aprakos であるという特質を利用して，複数現われる同一 verse すなわち重出テクストを比較検討することにより，そこに様々な改変が存在することが判明した。かかる改変は，語彙・形態・シンタクスの多方面にわたるものであるが，いずれの場合も東スラブ人の理解しやすい方向に沿ってなされたようにみうけられる。重出テクストは一方は伝統的な verse を残しながら，他方は改変形を残すという方式がぼんやりと認められる。葉の後の部分，すなわち menologion 部分に改変形が多いようにもみうけられる。上記の改変は，しかしながら，たとえば語彙に関して言い換えを検討する時，キュリロス・メトディオス以来の伝統的用語を，まずカノン内のシノニム・ダブレットを用いることにより，次にシュメオン帝期のブルガリアの新しい用語によって置き換えるという方式がなされたように想像される。この言い換えは，OCS の東スラブ人への釈義という役割を果したに違いない。第三に，第二の方式を越えて，東スラブ人独自の言い換えにまで至ることになる。その初めの一つが《ПРАВО》であった。

本稿は四福音書中のひとつマタイ伝に限定して，Mst 内の重出テクストから探り出すことができる事柄につき，検討し記述した。上記のごとき《変更・改変》が OCS テクストからのルーシの文章語生成に際して，多大な役割を演じたであろうことは想像にかたくない。

本稿前半部では，あわせて，Mst 研究開始にあたり Mst の書誌・特色等を略述しておいた。

注

（1） Жуковскаяはこれよりさらに以前に成立した可能性をほのめかす。参考文献 A 1, C 6 等参照。第 3 節に再述する。

（2） 岩井憲幸・服部文昭「古代教会スラブ語の地方的変種から古代ロシア文語の萌芽にかかわる研究 ——「アルハンゲリスク福音書」を中心として ——」，平成 10 年 3 月；同上「古代ロシア文語の萌芽期における特性の研究 ——「アルハンゲリスク福音書」を中心として ——」，平成 14 年 3 月；同上「古代ロシア文語萌芽期の第二段階におけるハイブリッド性の多様さと重層性について」，平成 18 年 3 月。（いずれも科学研究費補助金（基盤研究 (c)）研究成果報告書）。

（3） 参考文献 B 9。

（4） Metzger（参考文献 C 4）参照。

（5） ここでは《212г》は《第 212 葉ウラ第 2 欄》を，《213в》は《第 213 葉オモテ第 1 欄》を示す。

（6） 最後の文の解釈は「ローマ人への手紙」15.33 を参考とした：*ὁ δὲ θεὸς τῆς εἰρήνης μετὰ πάντων ὑμῶν • ἀμήν.* 参考文献 A 13 参照。

（7） 和訳は参考文献 A 11 による。

（8） 参考文献 C 5 の第 2 章《Языковые различия в повторяющихся текстах Мстиславова евангелия 1115–1117 гг.》.

（9） この《ロシア化》なる用語は《12 世紀のルーシの》と解されたい。

（10） SJS 該所参照。

（11） 参考文献 B 3, 4。

参考文献

A. テクスト

1) Л. П. Жуковская и др., Апракос Мстислава великого, М., 1983.
2) Quattuor evangeliorum Codex glagoliticus olim Zographinsis..., ed. V. Jagić, Berlin, 1879. (Rep. 1954, Graz).
3) Quattuor evangeliorum... Codex Marianus glagoliticus, ed. V. Jagić, SPb., 1883. (Rep. 1960, Graz).
4) J. Kurz (ed.), Evangeliarium Assemani, Tom II, Pragae, 1955.
5) В. Щепкинъ, Саввина книга, СПб., 1903. (Rep. 1959, Graz).
6) Е. Дограмаджиева и др., Банишко евангелие, София, 1981.
7) А. Востоковъ, Остромирово евангеліе 1056–57 года, СПб., 1843. (Rep. 1964, Wiesbaden).
8) Архангельское евангеліе 1092 года, Изданіе Румянцовскаго музея, М., 1912.（写真複製版および私家版翻刻による。）
9) Л. П. Жуковская и др., Архангельское евангелие 1092 года, М., 1997.
10) Nestle-Aland, Novum Testamentum graece, 25th ed., London, 1975.
11) 聖書，日本聖書協会，1974.

12) 佐藤研訳，マルコによる福音書　マタイによる福音書，岩波書店，1995.
13) 青野太潮訳，パウロ書簡，岩波書店，1996.

B. 辞典・書誌

1) Slovník jazyka staroslověnského, Praha, 1966–1997.
2) Р. М. Цейтлин и др., Старославянский словарь (по рукописям X–XI веков), М., 1994.
3) И. И. Срезневскій, Матеріалы для словаря древнерусскаго языка..., СПб., 1902. (Rep. 1971, Graz).
4) Словарь русского языка XI–XVII вв., М., 1975–.
5) Словарь древнерусского языка (XI–XIV вв.), М., 1988–.
6) L. Sadnik-R. Aitzetmüller, Handwörterbuch zu den altkirchenslavischen Texten, Heidelberg, 1955.
7) W. Bauer, Griechische-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments..., Gießen, 1928.
8) W. F. Arndt-F. W. Gingrich, A Greek-English Lexicon of the New Testament..., Chicogo., 1957.
9) Сводный каталог славяно-русских рукописных книг, хранящихся в СССР; XI–XIII вв., М., 1984.

C. 文法書その他

1) 木村彰一，古代教会スラブ語入門，白水社，1985.
2) W. Kiparsky, Russische historische Grammatik, I–III, Heidelberg, 1963.
3) A. P. Vlasto, A Linguistic History of Russia, Oxford, 1988.
4) B. M. Metzger, The Early Versions of the New Testament, Oxford, 1977.
5) Л. П. Жуковская, Текстология и язык древнейших славянских памятников, М., 1976.
6) Мстиславово евангелие XII века; Исследования, М., 1997.

【本稿は平成 18 年度～平成 21 年度文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（c)），課題番号：18520239）による研究成果の一部である。】